

## —国内動向—

## 1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向（令和8年3月）

## 【ポイント】

- 気温は、北日本でかなり高かった。降水量は、北日本日本海側でかなり少なかった。日照時間は、東・西日本日本海側と西日本太平洋側でかなり多かった。
- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万4688トン、前年同月比103.2%、価格は1キログラム当たり287円、同84.9%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万4930トン、前年同月比101.5%、価格は1キログラム当たり264円、同86.8%となった。
- 4月は、全国的に出回りは多くなると予想される。全般に産地リレーはスムーズで、価格も平年並みの推移が見込まれる。

## (1) 気象概況

上旬は、期間の中頃にかけて低気圧に向かって暖かく湿った空気が流れ込み、日本付近は暖かい空気に覆われやすかった。このため、旬平均気温は、北日本でかなり高く、東日本と沖縄・奄美で高かった。一方、期間の終わりには大陸から西日本を中心に寒気が流入したため、西日本では平年並みとなり、南岸低気圧の影響で関東地方の平野部でも雪が降った所があった。

旬降水量は、南岸低気圧や日本海から北海道付近を通過する低気圧と高気圧が周期的に日本付近を通過し、低気圧の通過後は一時的に冬型の気圧配置になったため、北日本太平洋側と西日本日本海側で多かった。一方、沖縄・奄美では、低気圧や前線の影響を受けにくかったため、少なかった。

旬間日照時間は、北日本日本海側と北日本太平洋側で少なかった。東・西日本太平洋側本州付近は、一時的に冬型の気圧配置になったことや高気圧に覆われた時期もあったため多かった。

中旬は、日本付近を移動性の高気圧と低気圧が交互に通過した。旬平均気温は、低気圧が北海道の東をゆっくり北上し、北日本を中心に暖かい空気が流れ込みやすかったため、北日本で

高かったが、冷涼な移動性高気圧に覆われやすかった沖縄・奄美では低かった。

旬降水量は、低気圧の影響を受けにくく、高気圧に覆われやすかった西日本太平洋側でかなり少なく、北・西日本日本海側、東日本太平洋側、沖縄・奄美で少なかった。

旬間日照時間は、西日本日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美でかなり多く、北・東日本日本海側と北日本太平洋側で多かった。

下旬は、日本付近を移動性の高気圧と低気圧が交互に通過した。

旬平均気温は、日本付近を通過した低気圧や気圧の谷に向かい暖かい空気が流れ込みやすかったことや比較的暖かい高気圧に覆われやすかったことから、全国的にかなり高かった。旬平均気温平年差は、沖縄・奄美で+1.9度となり、1946年の統計開始以降、3月下旬として2020年と並んで1位タイの高温となった。

旬降水量は、低気圧が北海道の北と本州の南岸を通過することが多く、特に月末に本州付近を通過した低気圧により、太平洋側を中心にまとまった雨となったため、西日本太平洋側で多かった。一方、北日本中心に低気圧の影響を受けにくかったため、北・東日本日本海側、北日本太平洋側で少なかった。

旬間日照時間は、北・東・西日本では日本海側を中心に高気圧に覆われやすかったため、北・東・西日本日本海側で多かった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は図1の通り。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側				日本海側 太平洋側
東日本					日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側
西日本				日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側

資料:気象庁「3月の天候」

1 平年を上回る水準				2 平年並み				3 平年を下回る水準			
------------	--	--	--	--------	--	--	--	------------	--	--	--

## (2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万4688トン、前年同月比

103.2%、価格は1キログラム当たり287円、同84.9%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向(3月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	104,688	103.2	94.1	287	84.9	102.2	280	289	291
だいこん	8,320	104.6	94.3	78	56.0	76.2	74	72	86
にんじん	5,655	108.0	92.4	194	68.1	103.7	174	193	208
はくさい	7,231	131.4	102.9	55	30.7	55.5	42	54	71
キャベツ類	15,867	108.2	94.0	88	51.3	83.7	85	92	89
ほうれんそう	1,520	91.6	95.9	425	91.9	99.3	356	491	449
ねぎ	3,934	129.2	107.0	298	51.8	79.7	370	290	246
レタス類	6,734	102.4	99.3	169	73.0	83.3	158	164	187
きゅうり	5,187	103.7	92.9	379	96.7	107.3	400	398	350
なす	1,886	103.4	90.3	470	95.3	111.0	535	483	428
トマト	5,125	99.5	94.2	425	99.3	104.7	425	424	426
ピーマン	1,848	91.3	90.3	678	96.0	99.9	709	699	642
さといも	296	94.4	73.7	399	101.0	119.8	428	392	382
ばれいしょ	6,000	104.4	91.0	288	121.3	139.7	298	292	277
たまねぎ	8,370	90.6	84.5	241	149.3	156.1	258	245	220

資料:東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1:平年比は過去5カ年(令和3~7年)平均との比較。

注2:豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、大幅に高値だった前年を3割以上下回り、平年をやや上回った(図2)。

葉茎菜類は、キャベツの価格が月間を通して大きな動きはなく、大幅に高値で推移した前年を5割近く下回り、平年を2割近く下回った(図3)。

果菜類は、ピーマンの価格が下旬にやや落ち着きを見せ、高値で推移した前年をやや下回り、平年並みとなった(図4)。

土物類は、たまねぎの価格が絶対量不足が続いていることから、堅調推移となり、前年を5割程度上回り、平年を5割以上上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

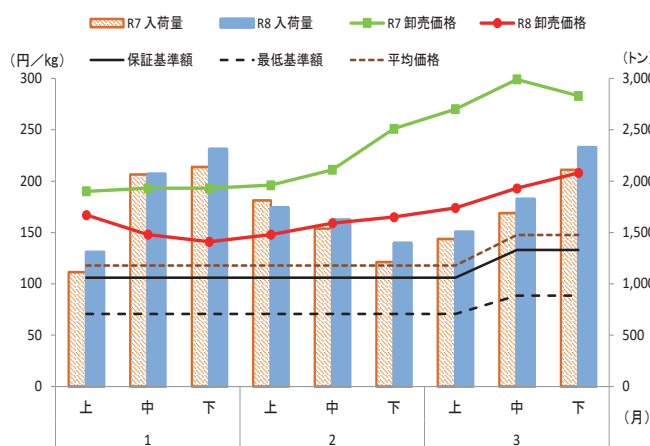


図3 キャベツの入荷量と卸売価格の推移

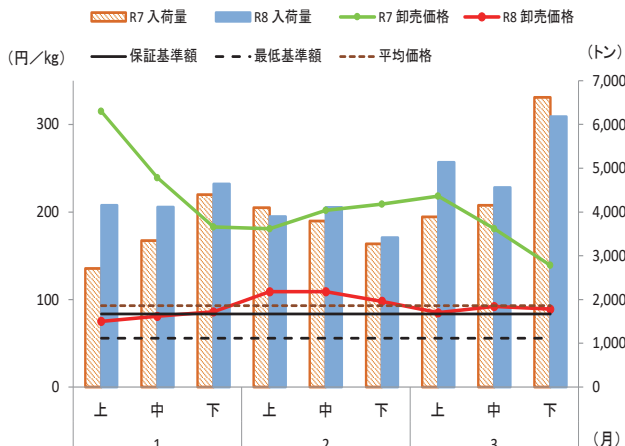


図4 ピーマンの入荷量と卸売価格の推移

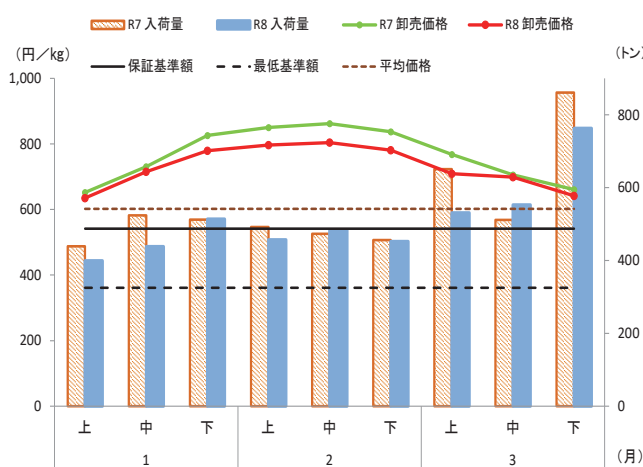
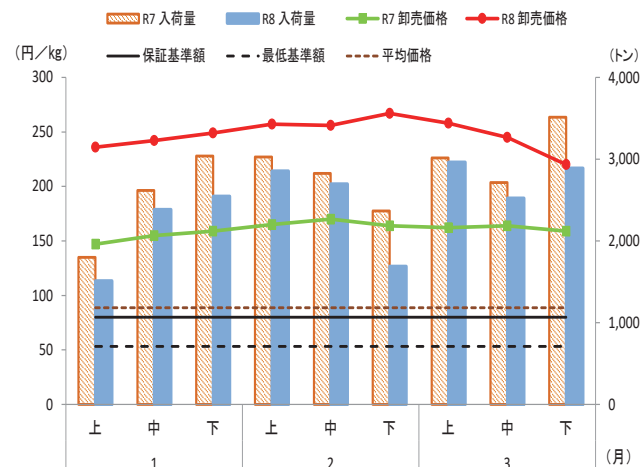


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、事業における過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	3月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>千葉産、神奈川産中心の入荷であった。千葉産の作付面積は前年並みで、播種期の乾燥により発芽と初期生育の遅延があったが、2月以降の気温上昇と適度な降雨で回復した。トンネル作についてはやや前進傾向となっている。神奈川産の作付面積は前年並みで、12月以降の乾燥で遅延傾向であったが、その後の天候に恵まれ、おおむね順調であった。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、高めに推移した前年を4割以上下回り、平年を2割以上下回った。</p>
	にんじん 	<p>徳島産、千葉産中心の入荷であった。徳島産の作付面積は前年並みで、播種も順調に進み、病虫害もほとんど発生せず生育は順調である。千葉産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ肥大も順調であった。生理障害が散見されるが、病害はほとんどない。シーズン終盤で旬を追うごとに漸減した。輸入の中国産は前年を4割以上下回った。総入荷量は、大幅に少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、大幅に高値だった前年を3割以上下回り、平年をやや上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>茨城産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、低温・乾燥により生育は遅延しており、前年より残量は多かった。総入荷量は、大幅に少なかった前年を3割以上上回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>価格は、下旬に持ち直したものの、大幅に高値で推移した前年を7割程度下回り、平年を4割以上下回った。</p>
	キャベツ類 	<p>愛知産を中心に神奈川産などの入荷があった。愛知産の作付面積は前年並みで、乾燥により生育はやや遅延していたが、適度な降雨と気温に恵まれ回復した。病害が散見される。神奈川産の作付面積は、前年をやや下回り、早期定植物については順調も、12月下旬以降の定植物については7～10日ほど生育が遅延している。総入荷量は、少なかった前年をかなりの程度上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、月間を通して大きな動きはなく、大幅に高値で推移した前年を5割近く下回り、平年を2割近く下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>茨城産、群馬産が中心の入荷であった。茨城産の作付面積は前年並みで、2月下旬以降の適度な降雨と気温の上昇により、生育は順調で前進傾向である。群馬産の作付面積は、前年並みで、露地作は一部乾燥などによる生育停滞があり、品質低下が散見された。また虫害の発生が見られる。総入荷量は、やや多かった前年を1割近く下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、やや高めに推移した前年を1割近く下回り、平年をわずかに下回った。</p>
	ねぎ 	<p>千葉産を中心に茨城産など関東春作中心の入荷であった。千葉産の作付面積は前年並みで、低温・乾燥の影響で生育はやや遅延傾向であったが、適度な降雨と気温の上昇で回復した。茨城産の作付面積は、前年をやや上回った。乾燥の影響が出ていたが、適度な降雨と気温の上昇で回復し、おおむね順調である。埼玉産の作付面積は前年並みで、一部病虫害が散見されるが、生育は順調で肥大も良好であった。輸入の中国産は、前年の半分以上の入荷となった。総入荷量は、少なかった前年を3割近く上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は、気温の上昇に伴い需要も減退したため、中旬以降は、非常に厳しい環境となり、大幅に高値に推移した前年を5割近く下回り、平年を2割程度下回った。</p>
レタス類 	<p>茨城産を中心に静岡産、香川産などの入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、低温・乾燥の影響により生育は遅延傾向であったが、適度な降雨と気温の上昇で回復し、おおむね順調であった。静岡産の作付面積は前年並みで、低温・乾燥の影響により肥大が悪く、生育は遅延傾向にあったが回復した。香川産の作付面積は、前年をやや下回り、圃場間で低温・乾燥の影響によるばらつきはあるものの、おおむね順調であった。総入荷量は、前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、下旬に向け底上げになったものの、やや高値で推移した前年を3割近く下回り、平年を2割近く下回った。</p>	

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産、群馬産を中心に埼玉産、千葉産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年並みで、一部、芯どまりや樹勢の低下が散見されるものの、生育はおおむね順調であった。群馬産の作付面積は前年並みで、一部、尻太りなどの品質低下が見られるが、生育はおおむね順調である。乾燥の影響により、うどんこ病が散見される。埼玉産の作付面積は前年並みで、曇雨天の影響により生育はやや遅れ気味で側枝の生育が悪い。また、一部アザミウマ類の虫害が散見される。千葉産の作付面積は前年並みで、年明け以降の低温・乾燥や、2月の曇雨天の影響により、一部肥大が遅れている。総入荷量は、少なかった前年をやや上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、下旬に向けて落ち着きを見せ、やや高値で推移した前年をやや下回り、平年をかなりの程度上回った</p>
	なす 	<p>高知産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、2月下旬の曇雨天の影響があったものの、それまでの好天から生育は順調であった。虫害も少なく、一部圃場で病害が散見されるが大きな影響はない。総入荷量は、少なかった前年をやや上回り、平年を1割程度下回った。</p> <p>価格は、中旬以降徐々に落ち着き、高値で推移した前年をやや下回り、平年を1割以上上回った。</p>
	トマト 	<p>熊本産を中心に、栃木産、愛知産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年並みで、病害が一部散見されているが、生育はおおむね順調であった。栃木産の作付面積は前年並みで、促成作の生育はおおむね順調であるが、若干成り疲れの傾向となった。2月の曇雨天の影響により、一部で病害が散見される。冬春作は日照に恵まれ、玉肥大が良く、生育は良好であった。愛知産の作付面積は前年をやや下回り、天候に恵まれ生育は順調だが、病虫害が懸念される。総入荷量は、やや少なかった前年をわずかに下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、月間を通してほぼ動きなく、やや高値で推移した前年をわずかに下回り、平年をやや上回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産を中心に茨城産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年並みで、一部成り疲れによる樹勢低下が散見されるものの、生育はおおむね順調であった。茨城産の作付面積は前年並みで、曇雨天および低温の影響により、一部花落ちが散見されているが、生育はおおむね順調であった。総入荷量は前年、平年ともにかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、下旬にやや落ち着きを見せ、高値で推移した前年をやや下回り、平年並みとなった。</p>
土物類	さといも 	<p>埼玉産を中心に愛媛産などの入荷があった。埼玉産の作付面積は前年並みで、収穫は終了し貯蔵からの出荷であり、残量も少ない。愛媛産の作付面積は、前年をやや下回った。玉肥大も良く、生育は良好で、病害の発生も少ない。輸入の中国産については、前年を4割ほど上回った。総入荷量は、少なかった前年をやや下回り、平年を3割近く下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足ではあったが、気温の上昇に伴い下旬に向けて徐々に落ち着いたことから、高値で推移した前年をわずかに上回り、平年を2割程度上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>鹿児島産を中心に北海道産の入荷があった。鹿児島産の作付面積は前年を下回った。一部の産地で、疫病の発生が見られるほか、2月上旬の降雪の影響もあり、生育の遅延が散見される。北海道産の作付面積は前年並みで、夏場の高温・乾燥の影響により、小玉傾向となっている。収穫は終了しており、発芽が懸念される。総入荷量は、少なかった前年をやや上回り、平年を1割近く下回った。</p> <p>価格は、堅調推移となり、高値で推移した前年を2割以上上回り、平年を4割程度上回った。</p>
	たまねぎ 	<p>北海道産を中心に静岡産などの入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫を終了した。高温・乾燥の影響もあり、小玉傾向で不作だった。静岡産の作付面積は前年を上回り、低温・乾燥での玉肥大の遅れは、その後の降雨と気温の上昇により、回復傾向である。後続の佐賀産も回復傾向ではあるが、低温・乾燥での生育遅延がみられる。輸入の中国産は、前年の倍以上の入荷量となり、米国産、ニュージーランド産が増加した。総入荷量は、少なかった前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足が続いていることから、堅調推移となり、前年を5割程度上回り、平年を5割以上上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

### (3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万4930トン、前年同月比

101.5%、価格は1キログラム当たり264円、同86.8%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(3月速報)



品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	34,930	101.5	96.2	264	86.8	104.5	258	260	272
だいこん	2,416	119.0	100.8	75	51.7	77.2	71	71	83
にんじん	2,306	99.1	102.4	183	71.3	101.0	161	183	204
はくさい	3,071	97.3	89.6	71	40.6	65.4	60	79	73
キャベツ類	5,387	114.8	102.2	77	51.4	82.1	76	77	79
ほうれんそう	500	92.1	101.6	415	92.8	97.6	326	465	463
ねぎ	920	122.5	114.0	376	58.7	86.6	426	377	340
レタス類	1,215	103.5	101.2	159	75.0	80.8	144	160	172
きゅうり	1,105	98.6	86.7	363	99.6	107.0	380	382	338
なす	790	107.8	107.8	429	96.2	108.2	461	441	405
トマト	1,514	91.7	100.3	395	95.1	101.3	388	396	400
ピーマン	566	92.2	122.8	637	92.8	93.6	659	665	602
さといも	53	105.6	80.3	342	76.2	104.1	321	356	345
ばれいしょ	2,670	89.7	83.4	277	111.1	135.0	282	286	264
たまねぎ	4,652	96.0	91.3	220	150.4	157.1	239	221	200

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年(令和3～7年)平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	3月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>鹿児島産を中心に徳島産、長崎産が主体となる入荷であった。鹿児島産は降雨のため収穫が進まずに出荷不安定となる時期があり、入荷量は伸び悩んだ。また、急な気温上昇もあり、品質低下品も見られた。長崎産は前進出荷気味となり、月の前半に入荷増量となったが、下旬には落ち込んだ。月間全体の入荷量は、前年を大幅に上回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>価格は、品質低下があり伸び悩み、極端に高値だった前年を5割程度下回り、平年を2割以上下回った。</p>
	にんじん 	<p>月の前半は鹿児島産が主体となり、中旬以降は後続の徳島産が主体となる入荷で、鹿児島産は下旬には切り上がった。気温高が続いたことで九州産地は前進出荷となり、鹿児島産、長崎産は切り上がり早く、月間入荷量は鹿児島産、長崎産とも前年をかなり下回った。徳島産も前進出荷気味で、当初から順調な入荷が続き、月間入荷量は前年を大きく上回った。輸入の中国産は、国内産の出荷が少なく、太物需要に対応するために一時期の入荷増の名残もあったが、入荷量自体は多くなく、前年をかなり下回った。月間全体の入荷量は、国内産地の切り替えもスムーズで、前年をわずかに下回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>価格は、旬を追うごとに上伸を続け、高値だった前年を3割近く下回り、平年をわずかに上回った。</p>

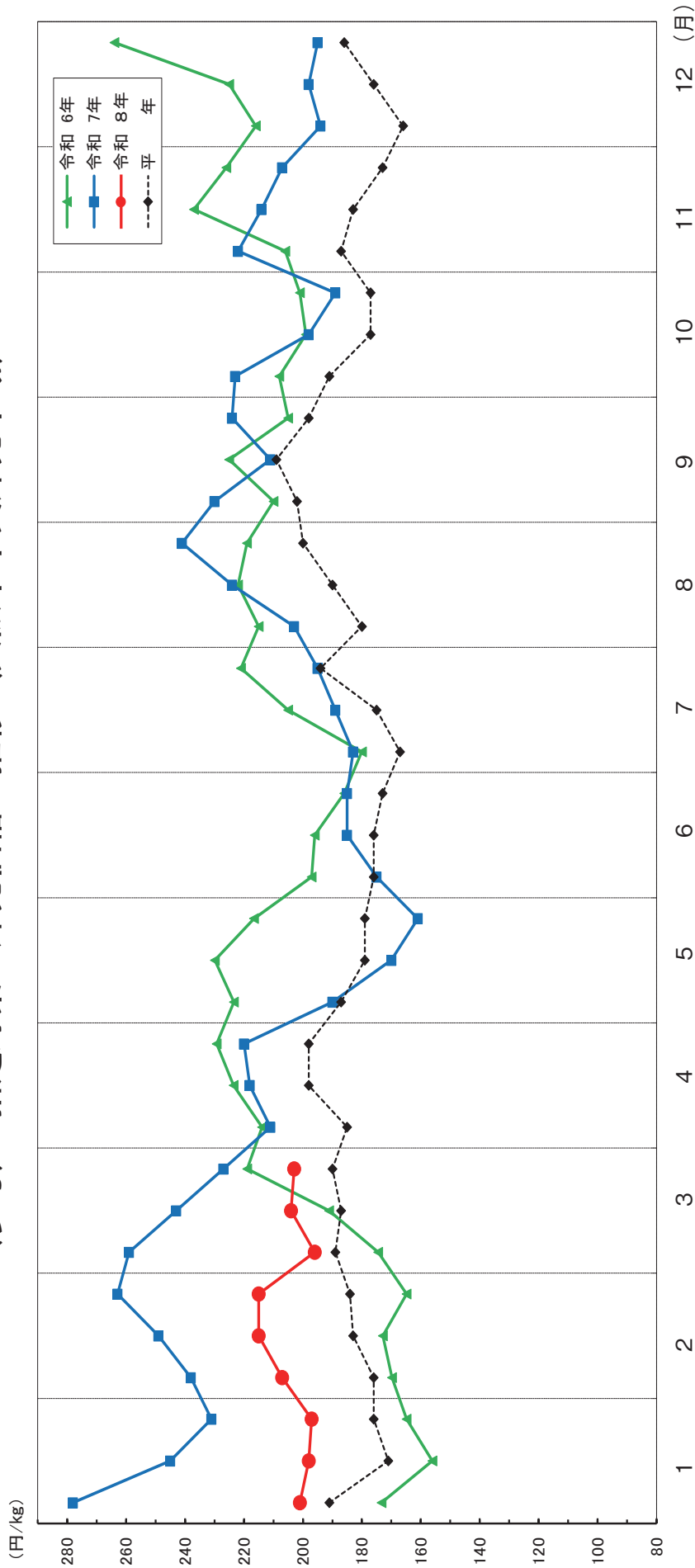
<p>葉茎菜類</p>	<p>はくさい</p> 	<p>長崎産が中心となり、茨城産、兵庫産、愛知産の入荷があった。春産地の長崎産は順調な出荷が続き、旬を追うごとに入荷増量となり、月間の入荷量は前年を上回った。茨城産は、上・中旬は秋冬物の残量入荷で下旬から春物のお荷となった。兵庫産は残量が多く、上・中旬は入荷量が多い状況が続いた。入荷は順調であったが、作付け自体が減少していることから、月間全体の入荷量は、前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>順調な入荷が続く中でも、気温が高く売場展開も少なく、需要が伸びずに価格は低迷した。月間の価格は、単価高だった前年を6割程度下回り、平年を3割以上下回った。</p>
	<p>キャベツ類</p> 	<p>寒玉キャベツは、愛知産を中心に大阪産などの入荷があり、春キャベツも、愛知産を中心に、和歌山産、兵庫産などの入荷があった。各産地とも天候が良く、気温も高く順調な産地出荷が続いた。生育期の状況も良かったため、秋冬の産地残量も多く、各産地とも出荷量が多い状況が続いた。月間全体の入荷量は、前年をかなり大きく上回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>価格は、入荷量が多かったことなどから、単価高だった前年を5割近く下回り、平年を大幅に下回った。</p>
	<p>ほうれんそう</p> 	<p>徳島産と福岡産が主体となり、近隣の大阪産などの入荷もあった。秋冬産地では、作付け面積を増やしたことで増収となり、天候が良く生育も順調だったことから、産地出荷量が多い状況が続いた。月間全体の入荷量は、前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>価格は、末端の売価が高い状況が続いており、消費が鈍いことから量販店の発注も少なく、単価安で推移し、月間では前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに下回った。</p>
	<p>ねぎ（白ねぎ）</p> 	<p>鳥取産と群馬産が主体となる入荷であった。鳥取産の春ねぎを中心に天候が良く、気温も高く順調な産地出荷が続き、全旬を通じて入荷量が多い状況が続いた。鳥取産の月間のお荷量は、前年の2.5倍以上となった。群馬産も下旬からの春物の入荷量が多く前年の1.8倍で、月間のお荷量も前年を上回った。月間全体の入荷量も前年を大幅に上回った。</p> <p>価格は、入荷量が多いことと消費地の気温上昇から消費が鈍化して、単価高だった前年を大きく下回った。</p>
	<p>ねぎ（青ねぎ）</p> 	<p>青ねぎは、徳島産を中心に高知産、香川産や近隣の大阪産などの入荷があった。細ねぎは、高知産と静岡産が主体となる入荷であった。天候が良く、気温も高く各産地とも生育良好で順調な産地出荷が続いた。徳島産の月間のお荷量は前年をかなり上回った。月間全体の入荷量も前年をやや上回った。</p> <p>価格は、入荷量が多いことや業務関係の荷動きが悪く低迷し、旬を追うごとに下落し、月間では単価高だった前年を大幅に下回った。</p>
	<p>レタス類</p> 	<p>ラップ物は兵庫産が中心となり、香川産や茨城産のお荷があった。裸物は長崎産、熊本産などの入荷があった。月の前半は、気温が低く不安定な出荷となった時期もあったが、全旬を通じておおむね安定した出荷が続いた。月間全体では、前年並みの入荷量となった。サニーレタスは、福岡産を中心とする入荷であった。不安定な気温の変化から生育も不安定となり、中旬のお荷量が落ち込んだことで、月間全体の入荷量は前年をやや下回った。リーフレタスも福岡産が中心となるお荷で、サニーレタス同様に中旬にお荷量が落ち込んだ時期があり、消費が鈍く引き合いも弱かったため、月間全体の入荷量は前年を下回った。レタス類全体の月間のお荷量は、前年をやや上回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>日中の気温が高い中でも朝晩は冷え込んだことから、消費は鈍く、荷動きが悪い状況が続いた。玉レタス、サニーレタス、リーフレタスともに価格は伸び悩み、レタス類全体では、前年を2割以上下回り、平年を2割程度下回った。</p>

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産を中心に高知産、徳島産も主体となる入荷であった。各地とも天候が良く、気温も高く順調な産地出荷が続いた。特売需要はあったが、末端の売価は高く積極的な荷引きとはならなかった。月間全体の入荷量は、前年をわずかに下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>価格は、特売により消費誘導したため値崩れを起こすことなく、月間では前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	なす 	<p>千両系は、高知産が主体となり、大阪産や岡山産の入荷もあった。長なすは、福岡産と熊本産が主体となった。各産地とも上旬は不安定な出荷で、入荷量も前年をかなり下回ったが、中旬以降に回復して、旬を追うごとに入荷増量となり、月間全体では、前年、平年ともかなりの程度上回った。</p> <p>価格は、日中の気温が高い中でも朝晩の冷え込みがあり、季節的にも需要は伸びず、入荷増量に伴って旬を追うごとに下落した。月間では、前年をやや下回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	トマト 	<p>愛知産と熊本産が主体となり、福岡産の入荷もあった。主産地では作付面積が減少している中で、熊本産は定植時期の強雨の影響により初期成育が遅れて出荷不安定な状況が続いたため、月間の入荷量は前年をかなり下回った。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年並みであった。</p> <p>日中の気温は高い中でも朝晩の冷え込みがあり、なかなか需要が伸びず価格も伸び悩んだ。気温高とともに、旬を追うごとに価格は上伸したが、月間では前年をやや下回り、平年をわずかに上回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産を中心に高知産などの入荷があった。天候が良く気温も高く、順調な産地出荷が続いた。入荷量も安定しており、下旬には入荷増量となった。月間全体の入荷量は、多かった前年をかなりの程度下回り、平年を2割以上上回った。</p> <p>日中の気温が高い中でも朝晩の冷え込みがあり、量販店での売場展開が少ない中で、消費は伸び悩んだ。月間の価格は、前年、平年ともかなりの程度下回った。</p>
土物類	さといも 	<p>愛媛産の入荷があったが、産地出荷量が少ない中でも加工仕向けからの引き合いがあり、入荷増量となった。輸入の中国産の入荷もあったが、入荷量は前年を下回った。月間全体の入荷量は、前年をやや上回ったが、さといも自体の需要が年々減少していることなどから、平年を2割近く下回った。</p> <p>価格は、業務関係の需要が多く引き合いがある中でも、安値で推移した。月間では、前年を2割以上下回り、平年をやや上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は鹿児島産が中心となる入荷で、順調な産地出荷が続き、月間の入荷量は前年を大幅に上回った。北海道産の入荷もあったが不作で、産地残量が少なく前年の3分の1程度の入荷であった。メークインは、北海道産が中心となる入荷であった。北海道産の不作による産地残量が少ない中であったが、後続の九州産地は、作付減で入荷が少なく、また、気温上昇に伴い北海道産も品質の低下が懸念された。中旬以降は出荷量が増えたため、入荷増量となった。ばれいしょ全体の月間入荷量は、前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、北海道産の不作による高値の影響が残り、月間では、単価高だった前年をかなり大きく上回り、平年を3割以上上回った。</p>
	たまねぎ 	<p>新物の長崎産が主体となり、北海道産の残量と兵庫産の新物の入荷があった。北海道産は不作で産地残量が少ないことから、入荷量は前年の3割程度にとどまった。この不足を補う形で、業務関係向けに輸入の中国産の利用が多く、入荷量は前年を大きく上回った。長崎産は順調な出荷が続き、旬を追うごとに入荷増量となり、月間でも前年の2倍の入荷量となった。兵庫産も順調なスタートで旬を追うごとに入荷増量となったが、月間全体の入荷量は、北海道産の入荷量が少ない影響から、前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、北海道産の不作で高騰した影響が残り、新物産地が入荷増量となる中、旬を追うごとに下落したものの、月間全体では前年を5割程度上回り、平年を6割近く上回った。</p>

(執筆：東果大阪株式会社 新開 茂樹)



# (参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月														
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬													
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210	225	205	208	199	201	206	237	226	216	225	264	
令和7年	278	245	231	238	249	263	259	243	227	211	218	220	190	170	161	175	185	185	183	189	195	203	224	241	230	211	224	223	198	189	222	214	207	194	198	195	
令和8年	201	198	197	207	215	215	196	204	203																												
平 年	191	171	176	176	183	184	189	187	190	185	198	198	187	179	176	176	173	167	175	194	180	190	200	202	209	198	191	177	177	187	183	173	166	176	186		

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（令和3年～7年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。

注3：プロッコリーの指定野菜への追加は、令和8年4月からのため、3月実績までを掲載している当該グラフに、プロッコリーのデータは含まない。